

長木誠臣●Seiji Choki

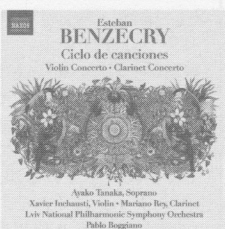
準 ピアソラやヒナステラ以外のアルゼンチン作曲家のCDが国内リリクスされるのは珍しい（ああ、カゲルもゴリホフもいたか）。1970年生まれの本センセリは現在バリを拠点に活動するが、いかにもコンセルヴァトワールのブルミエ・ブリ取得者のなかの保守的系列の側といった風で、華麗な楽器法と独奏楽器の技術のないし表現上の課題に一念に取り組んだ形跡がヴァイオリン協奏曲にうかがわれる。アルゼンチン出身だからといって、タンゴの要素があるとか、民俗要素が聞こえるとかというのは、もうこの世代だからはじめからなく（それを指摘しようとする言説が彼の周囲に溢れているとしても）、む

しろコスモポリタンな作曲家だと言えるだろう。その意味では、田中彩子のために書かれた《コロラトゥーラ・ソプラノとオーケストラのための連作歌曲》は例外的な作品なのかもしれない。アルゼンチンと日本の国花を歌ったヴォカリーズに始まる第1曲の《出逢いの道》などには、どこか和風の面持ちがあり、全体になんらかのエスニシティが感じられないこともない（それにしても桜を愛でたテクストの訳の「帝国の細やかさ」は、今の日本人が訳したとは思えないお粗末さ。原文になにか日本の今への皮肉があるのかと勘ぐってしまう）。4楽章からなるクラリネット協奏曲も軽みのあるソロと重厚なオーケストラの対比で聴かせる。演奏はウクライナのオレーケストラだが、まさにそれが作曲家の資質を物語ろう。

石田善之●Yoshiyuki Ishida

【録音評】ヴァイオリン、ソプラノ、クラリネットのソロは中央に位置し、やや近めの印象で音像感も明瞭。クリアななかにはうっすらとした残響感を伴う。オーケストラはいずれもソロから若干の距離を取って展開するが音響的には最低音部をやや抑え気味と抑えているようだ。各ソロはオーケストラに溶け込むと言うよりは常に最前面に描き上げられている。(91)

ンセクリが、彼女のために書いた歌をまとめて管弦楽版に編曲したもの。高音でも濃密な響きをもつ声の性質を生かした曲集だ。スペイン語の歌でありながら、時に日本の歌曲を思わせる楽想が混じっておもしろい。



■エステバン・ベンセクリ：ヴァイオリン協奏曲／コロラトゥーラ・ソプラノと管弦楽のための連作歌曲／クラリネット協奏曲

パブロ・ボッジャーノ指揮リヴィウ国立フィルハーモニー交響楽団、シャビエル・インチャウスティ(vn) 田中彩子(S) マリアーノ・レイ(cl)

[ナクソン©NYCX10153] ¥1800

白石美雪●Miyuki Shiraiishi

じつに濃い音楽だ。アルゼンチン出身でバリを拠点とするエステバン・ベンセクリの初の作品集。しかも3曲ともこれが世界初録音となる。日本での知名度は低いですが、今年50歳になる中堅作曲家。彼自身の内にある南米の民族的感情や手つかずの自然との交感といった原風景を、バリ音楽院で学んだ緻密な書法で彫琢していった作品は、知情に訴えかけるものとなっている。ヴァイオリン協奏曲はこのフリーズを切っても血が噴き出してきそうな、情念の奔流と蠢く命のドラマにむせ返る。リゲティの《アトモスフェール》のようなクラスターが混じったり、弦合奏に微分音を用いたり、20世紀の技法を巧みに使いながら、

民謡風の主題が展開される。クラリネット協奏曲はヴァイオリン協奏曲と同じく、南米の素材や民族音楽の形式を用いているが、はるかに開放感のある音楽。牧歌的な主題で始まり、全楽章にわたって、よく鳴るオーケストラが土俗性を体現する。

協奏曲でのソリストは2人ともブエノス・アイレス在住の演奏家で、ベンセクリの音楽と同化した感性豊かな音楽を作り上げている。一方、連作歌曲はここで歌っているコロラトゥーラ・ソプラノの田中彩子の声からインスピレーションを得たバラッド。高音でも濃密な響きをもつ声の性質を生かした曲集だ。スペイン語の歌でありながら、時に日本の歌曲を思わせる楽想が混じっておもしろい。